

表一名ずつがえらばれて争うことになりました。

講道館では、そのころ、富田常次郎、横山作次郎、山下義韶、西郷四郎の四人が四天王といわれていたので、その中からえらばれることになりました。

そして、嘉納治五郎は、講道館の代表を西郷四郎ときめました。相手は、戸塚揚心流の照島太郎——四郎は何回かその姿を見たことがあります。三十二歳。がっちりした大きなからだ、首も太く、いかにも柔術家らしいと思つていました。

「勝てるかな。」

心の中に不安な気持ちがおこります。

「いや、勝たねばならない。講道館のためにも、日本のこれからの柔道のためにも、おれは勝たねばならないのだ。」

そうは思うのですが、照島の姿を思いうかべると、何となく気持ちがあせつ